

他阿の形成

竹 内 明

時宗二祖他阿真教の法語に、

我等が本分自己の心に如々含識を兼ねて、塵々法界を隔つる事なけれども、客塵煩惱に障礙せられて自他彼此の情量を分別す(『遍上人絵詞伝』第六)

とある。すなわち、本来凡聖は一如にして法性は一味であり、衆生の心性は清浄なる真如たるべきものであるが、「妄執妄念慢心虚仮名聞利養人我あつくおほふて仏性をうづ」(『他阿上人法語』巻第五)めるが故に、衆生は、差別相に住して自他彼此の迷情を生じ、無始已来、「本覺の都とも迷ひの凡夫ともしることなく、業の軽重に随ひて六道に輪廻」(同上書巻第三)して、無窮の生死をうけているのであり、ここにおいて、「みづからが一心を他の衆生とみへだてけるといふ悟りをえて、六道の衆生とへだてなくなるをほとけと名づくるあひだ」(同上)、同じく法身ではあつても凡聖の差は絶大であり、凡夫はあくまでも可能性としての未来仏に留まるのである。

つらくこの事をかながふるに、生死無常の転変をあきらめず、

他阿の形成(竹 内)

実有著我の迷識に縛せられて苦海に浮沈す。朝霧の風を待たざるのすがた、夕雲の夜空にかくるゝがごとし。老少ともに憑みなく、親疎おなじく滅亡す。この理りまことに眼前なり。たゞ知ると知らざるとにあり。これを知らざるを愚者となづけ、これを知るを智者といふ。(同上書巻第四)

一体、「仏性を具足せざる衆生はな」(同上書巻第五)い。しかし、吾我を貪愛して「五蘊の身をおしみ」(同上書巻第二)、名利に繫縛されて、貪瞋痴の煩惱の尽きることのない衆生は、諸法の実相に背反せる存在であり、真如法性の理に暗き愚者であるが故に、

もとより凡夫のこゝろは識情とてまことの心にあらず。(同上書巻第七)

と断ぜられる他はない。「欲心繁多にして、貪瞋痴三毒の煩惱に逼迫せられ、輪廻生死の業因つきずして、三惡道の業苦を体とする」(同上)、「凡夫の性は魔の所屬なるあひだ、惡念おこらざる時も魔障」(同上書巻第四)であつたのである。

ここに、

古人云く、寸陰可惜、時不待人と。此の言誠なる哉。（『一遍上人
絵詞伝』第六）

と嘆ずる他阿は、門弟らに、「はやく無常の身命をかへりみて、日夜の勤修おこたらざる」（『他阿上人法語』巻第六）ことを高調し、発心・修行の要を説く。

身は芭蕉泡沫に似たり。命は電光朝露のごとし。須臾に生滅し、刹那に離散す。（『一遍上人絵詞伝』第六）

迷ふとも人のむかしは仏なればもとの都に帰らざらめや（『他阿上人法語』巻第八）

「罪とは心のこと」（同上書巻第五）であるが故に、「心は本ものにて、みちなき安心」（同上書巻第四）なのであり、彼が「その機のまことに発心せず、廻心せぬほどは、（中略）いかなる教道も何の用にかたつべき。」（同上書巻第二）と説く所以である。

廻心のこゝろなくしては、もとの三塗の業因なるべきがゆへに、往生のみち有るべからざるものなり。（同上書巻第七）

しかして、彼は、

仏道といふは但欲をはなるゝより外は別の子細なし。此の欲心自分の仏性をうづむ。（中略）これをみな捨離すれば、そのしたより仏性漸く顕現し、法体念々に増進す。（同上書巻第二）

と述べて、識情であり、罪である心を捨離して、仏性を発現

すべきことを説く。すなわち、「まことの智者は、身をすて、欲をはなれて、一切に著をなさず」（同上書巻第二）、「むねの欲をはらひて仏性をあらは」（同上書巻第三）し、「かならずみづからの胸の中仏座となる」（上同）ことができるのである。

ここに、他阿は、『道場制文』において、

法性無相之本源、流三出生死之大海。唯男女愛執之一念、流転三界之妄業。輪廻於六道之嶮阻、是自身著我之迷識也。

と断じ、衆生が迷界に流転する根元は姪貪愛着の心に存するとして、「出家は身を人にたくらべず、孤独の心をおこすべき」（『他阿上人法語』巻第一）であり、一念発心して、一切放下の孤独の底に、「娑婆生死の界を厭ひて、彼の淨刹を欣慕」（同上書巻第三）する、捨家棄欲の厭欣時衆に身をなして、「生きながら死して」（同上書巻第四）、「自を境界に任する姿」（同上書巻第一）こそ、まことの智者の名に値するとした。彼が、親子を捨てゝ住处を離れ、身をなきものになして、身命を仏に帰入して、決定往生を遂ぐべき信心計りにて、一切の用事をつくしてさふらふものどもを時衆とは名づけ候。（同上書巻第三）総じて、善惡愛恚は境界にはあるべからず、識情ひとつのとなり、と明らかに、善惡ともにその心を用ひずして、一切を他に任せば智者至極の悟りなり。（同上書巻第二）

と語る所以である。

しかして、他阿は、「身命を仏に奉りて、（中略）身を身と

もせず、心を心ともおもはずして、万事を他に任せ」（同上）
ることを説く。ここに、「身命を仏に奉り」、「万事を他に任
すといふは、われ／＼が迷ひの執心をもちひざるため、また
は用事をつくさん爲に、身命を知識に帰命する」（同上）こと
である。すなわち、彼の著『奉納縁起記』に、

木仏無詞故尋而無示。知識者当体有其識。故往生之指南出離
之要路無過三知識之一句。

とあるごとく、「仏之御使」（同上）であり、「生身仏体」（『他
阿弥陀仏同行用心大綱註』）である知識に帰命することであり、
「みづから胸の業障三塗に落つべきいはれをしら」（『他阿上人
法語』巻第二）す、「我身に生死をはなるゝ道の知りがた」（同
上）き末世の根機は「但知識を頼」（同上）んでこそ、生死輪
廻の門を出ることができるとする。しかして、時衆は、そ
の入衆に際して誓いの金磬をうち、知識帰命の宣誓を行なう
のであり、これを帰命戒という。一体、これは、他阿が、「頭
をそるものは千万あれども、心をそるものは一両も侍らず」
（『一遍上人絵詞伝』第六）という衆生の現実を見つめ、「我は
無道心なり」（『他阿上人法語』巻第四）、「我に信心道心な」（同
上巻第二）し、と現存在を捉えたことによるものである。

おのづから、世をのがれ、身を捨つる者も、六賊に随逐して法財
を失ひ、五欲に貪著して諸悪をたくはふ。これは力なき凡界のふ
るき習ひなれば、我と制断する事叶ひがたき間、いきながら死し

他阿の形成（竹 内）

て身命を知識にゆづり、心の所望をかなへずして永く用事を尽
す。我を我にせざれば居を他所にうつさず、心を心と用ゐざれば
思ひを万事に叶へず。是則ち、他力に帰する至極をあらはし、三
心を事相にふるまへる色也。（『一遍上人絵詞伝』第六）

思うに、知識帰命の主張は、無常遷流の世に諸法の実相に
随順せずして、六道に輪廻している衆生への愛惜の念より発
したものであつて、もとより他に驕慢ならんがための高所意
識ではありえない。故に、他阿は、慢心を否定し、人師を氣
取ることを固く戒め、

知識気色して人をいやしくおもひなすあひだ、皆慢心をさきだ
てゝ思慮なきゆへに、彼が業をうけとりて魔道の業となるべし。

（『他阿上人法語』巻第二）

と弾呵し、更に、

身命を弥陀に帰して往生の大事より外はその用なきのあひだ、芸
能をすて、智恵を捨て、徳を捨てぬるゆへ、何事も人にをしめる
事なし。仍てわれは弟子一人もゝたず。面々信心ありて名号を唱
へば、自他ともに往生を遂ぐべければ、ただ皆同行なり。（同上）

と説く。一体、彼自ら、その身心を厭ひ、自身を無きものに
なし、一切を捨て、遂には「もと捨てたりと思へる心振舞ひ
のその執心を捨て」（同上）はてた時衆であり、弥陀の前には
ともに平等の求道者であつた。「機根のかたには九品の差別
ありといへども、往生の一行は念仏におさまるあひだ、信心

他阿の形成（竹内）

の行者のまへには差別」（同上書卷第五）なく、時衆は一類同伴の念仏行者であるが故に同行という。しかしながら、

知識の言葉を一偏にこゝろえて、知識も我も同行にてこそあれ。

必ずしも恭敬すべき謂れなし、と領解せば、その人はまた信心かけぬべし。（同上書卷第二）

としなくてはならない。何となれば、「往生のいはれをしめす人」（同上書卷第五）たる「知識の縁なくしては、信心の落居さだまるべからざる」（同上）ものであり、因たる所化の時衆は化導増益の知識を縁として信心の落居することを与える。

知識は、時衆の行修の懈怠を戒め、「魔縁のたぶらかしを遁れさせ給ひて」（同上書卷第三）、その往生の縁となる行者中の先達であり、彼に対する帰命戒が厳に守られながらも、相互に同入和合海の同行であり、差別なき仏弟子なのである。

それは、能所・師弟の対立を止揚した能所不二、師弟一如の境界であり、「教訓する人は人を教訓するにてはなくて、我身の懺悔をする」（同上書卷第二）という、教えつつ教えぬ世界であるが、それは、もとより師道の破壊や弟子意識の打破ではない。否定された対立においてこそ、真に、師は師としての意義を獲得し、弟子は弟子としての位置に住するのである。能化と所化とは平等であつても同等ではなく、化導する者とされる者との自ずからなる差異は存するのである。まさに、「親近するところの同行等侶すなはち人我甚しき情識も、

われと等しき悟りをえさするあひだ、これにて同行善知識とは名づくる」（同上）所以である。

しかして、他阿より三祖智得への消息に、

人界に生をうくるに、その体相は、別々なるに似たれども、仏性をはかる事なし。然れども、知識のくらゐになりては、衆生の呼ぶところの名なれば、自今已後は、量阿弥陀仏を捨て、他阿弥陀仏と号せらるべし。この名は一代のみならず、代々みな遊行かたにうけつぐべきなり。（同上書卷第二）

とある。すなわち、他阿弥陀仏とは、ひとり二祖真教の固有名詞に留まるべきではなく、代々の遊行上人に受け継がれるべきものである。何となれば、時衆の統宰者たる遊行上人は、まさに捨身度生の同行善知識、大因縁の善知識であり、しかして、七祖託何は、

所謂他者十方衆生、言阿弥陀者称我名号、仏者願成就覺体也。（『他阿弥陀仏同行用心大綱註』）

と述べて、衆生と仏とが因となり、縁となつて、生仏不二・能所一体であることを表わすものが他阿弥陀仏であり、それは南無阿弥陀仏の名号と全同である、と説く。この故に、人皆すべて本来他阿弥陀仏であるはずであるが、衆生は我他彼此の人我にうつもれ、「識情万端にして一准なら」（『他阿上人法語』卷第一）ざるが故に、今は暫く知識の位のみを他阿と呼ぶといふのである。

しかして、「六十万人すゝめはてゝはまた始めてすゝむる」(同上書卷第五)、六十万人の同行善知識他阿弥陀仏は、衆生を自己と同等の境にまで引き上げ、「われと等しき悟りをえさす」(前引)ために、身心を放下し、「なにごとをも、仏知識になげあづけまいらせて」(同上書卷第一)、往生を先途と、名号に帰入することを説いた。一体、他阿真教において、「今生より外に後生な」(同上書卷第六)く、かつ、「今の念仏より外に臨終」(同上)なく、しかも「この領解たちぬる行者は、今生後生臨終平生ふたつなくして心安穩になる」(同上)のであり、「念仏往生は念仏即往生の行なれば、まうすより外は別の安心な」(同上書卷第三)く、その念仏こそ「業を滅して浄土に生ずべき清浄の行体」(同上書卷第四)であり、その「利劍輪廻の絆を截つて、すなはち報土に送るべきゆへに」(同上)、声々が臨終であり、念々に往生をえる。しかして、「一念のゝちはこの心つねになけれども、はや光中に撰取せら」(『他阿上人法語』卷第四)れて、「輪廻こゝにたえ」(同上書卷第七)、しかも、「念仏の声の中より来迎引接たれ給ひて、不退の浄土へ迎へとり給ふあひだ、生死の命はたちまちに滅して、無量の寿命を得得」(同上書卷第七)し、「きはもなくながき仏の命とひとつにな」(同上書卷第三)つて、ここに、あくまでも時間の中にありながら、時間を超えて、永遠に参与することとなる。

他阿の形成(竹内)

貪瞋具足妄愛の心の底に纔かに一念帰命する時、身心我にあらず、弥陀と一致に成りぬれば、彼此三業の謂はれ成じて行住坐臥則ち弥陀の四威儀なり。仏と衆生と一になりかへり、迷ひも悟りも二なきものなり。(『一遍上人絵詞伝』第六)

まよひこし心も身をも捨てつればわれならぬ我ぞ御名をとらふる(『他阿上人法語』卷第八)

まさに、当体の念仏に、身口意の三業、行住坐臥の四威儀は実相を離れず、「法のかたより融通して、自他の行体一如」(同上書卷第六)となり、我他彼此の人我は泯没する。自己も他己も、本願弘誓に光被せられて、法界身中にあり、阿弥陀仏と一体となつて、無我無人の名号のみが残るのである。それは、自もなく、他もない、唯仏与仏・仏々相念の、唯一念仏の世界であり、人皆すべて南無阿弥陀仏即他阿弥陀仏となる。しかして、他阿弥陀仏にまで形成せられ、「ほとけとひとつにな」(同上書卷第二)つた時衆は、「知識の心と所化の心と替はりて」(同上)、ここに、大因縁の善知識として、自他即一行を展開するのであり、それは、まさに、還来穢国して人天を度す、菩薩行ともいうべきものであつた。まさに、他阿の教化理念は、他阿の形成を志向するものであつたのである。

(本稿は昭和四十六年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。)